

[学術論文]

青年期における ASD 者から健常者にみられる
「知的こだわり」行動の捉え直し

—キャリア支援・生活充実支援の視点から—

The reconsideration of "intellectual repetitive" behaviors seen in Autism
Spectrum Disorder and individuals without disabilities in adolescence
: from the perspective of career support and support for life enrichment

天谷 祐子

Yuko AMAYA

Studies in Humanities and Cultures

No. 36

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 36号

2021年7月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN

JULY 2021

[学術論文]

青年期における ASD 者から健常者にみられる 「知的こだわり」行動の捉え直し ーキャリア支援・生活充実支援の視点からー

The reconsideration of "intellectual repetitive" behaviors seen in Autism Spectrum Disorder and individuals without disabilities in adolescence

: from the perspective of career support and support for life enrichment

天谷 祐子
Yuko Amaya

要旨 本研究の目的は、中学・高校の普通学級に所属している ASD 者や、診断がついているわけではないが「知的こだわり」行動がみられ同輩と関係を結ぶことに困難を抱える健常者に焦点を当て、「知的こだわり」行動を「強み」と捉え、キャリア支援や生活充実のための支援に生かす方策を探索的に検討することである。具体的には、「知的こだわり」行動に焦点を当てる有効性の議論、文献等に見られる「知的こだわり」行動のバリエーションの洗い出し、それを支援に生かす切り口の先行事例の収集を行った。先行研究の多くは、特別支援の枠組みにおける個別事例にとどまっていたり、支援の目的が直接的な形で就労のみに特化されたりしていた。今後普通学級に所属している彼ら・彼女らの広い意味でのキャリア支援や生活充実のための支援に活用するにあたり、考えられる課題について議論した。

キーワード : ASD、こだわり行動、キャリア支援、生活充実支援

1. はじめに

本研究において焦点を当てている対象者は、主に中学・高校(時には小学校高学年)の普通学級に所属している知的遅れのない自閉スペクトラム症と診断された人(以下「ASD 者」と表記)や、特に診断がついていたり、目立つ特性があったりするわけではないが、同年代の同輩・仲間と、自身の「知的こだわり」について思いや考えを共有することが難しい健常者である。一般に、特別支援クラスや特別支援学校に所属する児童・生徒の場合、教員や支援者は最初から彼ら彼女らを個別に支援をする対象として捉える。しかし、本研究でフォーカスしている対象者は、明らかな学校不適応症状を呈しない限りは、「一般の」「支援を必要としない」人として見過ごされがちの人々である。しかし本研究でフォーカスしている対象者は、青年期に入ってくると、対人関係上の困難を抱えがちである。この点について古長(2020)は、ASD 者について、他者との関係の中で孤立感をかかえることになりやすく、思春期・青年期になって二次的適応上の問題を生じることを指摘し、青年期・成人期を見据えた支援のあり方について研究の発展が望まれるとしている。活動の自由度が増す高等教育や職場において困難を抱えがちとなる前に、また就職活動にあたり困難を抱えてしまっ

たり、就労後に困難を抱えてしまったりしてから支援を始めるのではなく、それ以前の時期から支援の手が届くと、彼ら・彼女らのより充実した生活につながる。

以下、本研究において、青年期における知的遅れのないASD者や健常者に見られる「知的こだわり」行動の捉え方について、「知的こだわり」行動に注目して議論することの有用性を述べ、その後「知的こだわり」行動に関わる現状を概観する。そして、「知的こだわり」行動の捉え直しについてキャリア支援・生活充実支援の視点から具体的方策に向けての方針を述べる。最後に今後の課題について述べる。

2. 「知的こだわり」行動を支援の切り口とする有用性

金生(2016)は、「こだわり」と言えば、ASDの中心的症状である「限定された反復的な行動様式」がまずは挙がってくるとしている。具体的に金井(2016)は、些細な変化を嫌がって強い抵抗を示したり、いつも同じ道を通りたがったりすることなどを挙げている。しかし、「こだわり」はASD者だけに見られるわけではなく、ASD傾向者や健常人々にも見られる。また一般に小さな子どもにも広く見られる。例えば、阿部(1997)は、児童期の一般の子どもの20~30%程度に「同じようなものを、たくさん集めるくせ」、「タオル、毛布、人形などきまったものをそばにおいておかないと、またはさわっていないと落ち着かない」という強迫様行動が見られたことを報告している。ここでの事例は、「知的こだわり」行動というより強迫行動に近いものも含まれているが、興味を持った対象物に対して、細かな違いに注目して、多くの種類のものを手元に置きたいという行動はASDの「こだわり」行動と共通項があるものと捉えられる。この点について社会学者の池上(2019)は、アメリカニューヨークを拠点にして、普通とは異なる方法で世界を認識する人々と交流してきたなかで、ASD者や、発達障害の診断は受けていないが世界を違った方法で見たり感じたりする人たちに出会ったという。そういった人たちの認知特性と、いわゆる「発達障害」とされる人たちの認知特性は、時に地続きであるように見えたと述べている。したがって、適応しているとされている普通学級に在籍するASD者や健常者にみられるレベルの「こだわり」行動を地続きに捉えようとする切り口は、ある程度妥当であると考えられる。

以下、「知的こだわり」行動を本研究でフォーカスしている対象者に対する支援の切り口とする有用性について、5点挙げる。

第1に、数多くあると思われるこだわり行動の中でも、特に「モノ」に対する狭く深い興味関心からくるこだわりは、周囲の同輩がついていけないような、対人関係上の問題につながるリスクではなく、(周囲の同輩がついていけない)高度に知的な活動とポジティブに捉えることもできる。このような行動を取りあげ「知的こだわり」行動とするならば、一般の人に見られない彼ら特有の「強み」としてポジティブに生かせる可能性が出てくると考えられる。

第2に、発達障害を持つ人への支援の場合、特にASDのみならずADHDやLDを併せ持つ人も多く、人によって外部から観察される具体的特徴が多様である。具体的特徴が多様な人に対しては、個別の特別な支援を進めていくしかなく、専門家の手を借りなければ具体的方策につながりに

くい。しかし、専門家でない者が外部から対象者と接触した際に、行動として「知的こだわり」が見られたり対象者から打ち明けられたりする場面は日常的に存在する。対象者に診断がついているか否かは別にして、外部から見て行動として「知的こだわり」があるかどうか、どのような「知的こだわり」があるのかが判明しさえすれば、「知的こだわり」を中心的切り口として大まかな支援・対応の方策につなぐことができる。そして、そういった行動に注目する切り口ならば、個別に支援を受けていない普通クラスに在籍している程度の軽度な状態であったとしても、支援・対応の方策につなげやすいと思われる。

第3に、ASD 者と、診断はついていないが「知的こだわり」の見られる健常者は、両者ともにその「知的こだわり」のあり方のために、学校等で仲間から疎外され、メンタルヘルス上の問題につながりやすい点が共通している。診断の有無で区別するよりも、「知的こだわり」行動の捉え方や周囲・学校との間の関係性に共通して課題がある点をまとめて捉える方が、現実的支援になると考えられる。具体的には、ASD 者と定型発達の子のこだわり行動の違いについて、例えば白尾(2016)では、興味のこだわりは定型発達の子にも見られるが、高機能 ASD 児と定型発達児には興味のこだわりの持ち方にそれぞれ特徴があると述べている (Anthony, Kenworthy, Yerys BE Jankowski, James, Harms, Martin, & Wallace, 2013)。ASD 児は特定の品目やモノに強い愛着を示す、特定の感覚刺激をもたらすものを求める、事実に基づいた情報を集める、物を買集めたり収集したりするなどの傾向が高いが、定型発達児では人物やスポーツに関するこだわりを持つ傾向が高いという。一方で白尾 (2016) は、学校生活の中で「博士」と呼ばれる (ASD と診断されているわけではない) 子どもが、並外れた知識を持ち、クラスメイトから異質と扱われる一因となるのに加え、その子の関心の薄い授業活動や課題への取り組みがおろそかになりがちで、「わがまま」などとみなされ、排除される方向へ拍車がかかる面もあると指摘している。つまり、ASD 者か健常か、を分けて見た場合、こだわりの対象に違いがあるかもしれないが、ASD はスペクトラムである。ASD までいかない ASD 傾向者や健常者でも「知的こだわり」行動の見られる人は、その行動がゆえに学校生活で周囲となじめないリスクをはらんでいることがわかる。興味関心の対象が両者間で違ったとしても、「知的こだわり」行動のために自尊感情が下がり、支援が求められる点は両者間で共通していると考えられる。

第4に、このような「知的こだわり」行動に問題を感じ、本人がその行動をすることについて心理的負担感を感じているとか、やめたいと思っているのにやめられないと感じているということがあれば、その行動を減らすための支援が必要である。しかし、「知的こだわり」行動のほとんどが、本人がやりたくてやってしまう行動である。ならば、それを周囲が制限するよりも、「調整」し、「強み」として生かすことが、対象者自身の動機づけを下げずに済むと考えられる。時には、「知的こだわり」は対象者の心理的安寧にもつながる。例えば白尾(2016)では2006年に放送された連続ドラマ「僕の歩く道」で、自閉症の青年が混乱したり困惑したりすると、興味の対象である「ツール・ド・フランス」の歴代優勝者の名前を唱え続けるというシーンが何度も登場したことを挙げ、情緒がかき乱される状況で心を安定させ、支えとなる存在であると述べている。また白石

(2016)は、強迫症と「こだわり」行動の違いについて、強迫症には苦しみの感情が伴うが、こだわり行動には「楽しさ」「嬉しさ」が伴い、「充実感」「達成感」をもたらし、「自己肯定感」につながることも多いとしている。以上より、「知的こだわり」行動を、常に抑制すべき困った行動として捉える以外の切り口も必要であると考えられる。

第4の点について、「知的こだわり」行動やそれに類する行動を、彼ら彼女らの「強み」としてとらえ直す動きが出てきた。例えば、金生(2016)は、こだわりについて、ASDやOCDなどのこころの問題の主症状から一般の人の思考や行動の傾向までつながる広がりにとらえることができるとしている。そして、こだわりが子どもの生活に支障をきたすほどなのか、子どもの長所を帳消しにするほどなのかを考える必要性を述べている。そのうえで、こだわりを生活に役立つ方向にいかす可能性を探ることも指摘している。本研究もその立場に立ち、彼ら彼女らの、一般に減らすべき問題行動として捉えられていた「知的こだわり」行動を、彼ら彼女らの「心の支え」「進路選択・就労の方向性に生かす」特徴としてとらえ直そうとするものである。

第5に、「知的こだわり」行動を中核に、それに付随する形で「生きるためのスキル」のトレーニングにつながる方が、対象者の取り組み全般に対する動機づけが高まりやすいと考えられる。

「知的こだわり」行動を生かせるような就労や余暇の生活に向けての努力であれば、(何も目標がない状態に比べ)対象者自身が苦手とする社会的コミュニケーションや自活するためのスキル習得へのスキルを高めたいと思えるのではないか。スキル習得にもある一定の期間が必要であることから、長期的方針を学校に所属しているうちから想定できることが重要であると考えられる。

ただ、現状そのような支援は、知的障害を伴うASD者の支援や、個別支援にとどまっている。またマニュアル化されている支援としては、直接的な就労支援が主である。例えば、梅永(2021)によるBwap2というアセスメントツールを使った発達障害の人の就労アセスメントツールが挙げられる。また発達障害の子のためのお仕事紹介の書籍も出版されている(例:TEENS執筆チーム,2017)。それらの支援を、より軽度のケースに応用するにはバリエーションや蓄積が少なく、また応用するにあたり、軽度の人向けに調整が必要な場合もあると思われる。

3. 実際の「知的こだわり」行動の洗い出し作業

知的遅れのないASD者や一部の健常者に見られる「知的こだわり」行動には、どのようなものが挙げられるのだろうか。特別支援の文脈での個別支援や、知的障害を伴うASD者への支援の事例、国内外の書籍から、「知的こだわり」行動の洗い出し作業を行う。

フリス(2009)は、アスペルガーによる自閉的行動のケース研究の記述を引用し、ASD者の限られた狭い分野での知的な優秀性による目をみはる妙技について取り上げている。そしてフリス(2009)は、著書内のASD児の事例で、ジグソーパズルを表の絵柄をみなくても組み合わせることが得意であること(幾何学図形を組み合わせる心理学的テストで優れた成績を上げる)、積み木を細かく調べることに我を忘れて熱中したり、音楽が好きでヴィヴァルディの「四季」にいつまでも耳を傾け、メロディを完璧にハミングしたりしていることを報告している。絵のないパズルでも絵の

あるパズルでも自閉症の人は一遍一遍を合わせることを楽しめるとしている。またフリス(2009)は、ASD 者が隠し絵探しが得意であること(場からの独立的な認知スタイルにたけていること)、積木模様テストで好成績であること(ゲシュタルトを小さな形態に分けることが得意)、機械的記憶がすぐれていることを挙げている。

白尾(2016)は、「〇〇博士」的こだわりの強い子どもの興味の世界の例として、蛾の羽の模様の美しさ、デザートローズ(砂漠の薔薇)という鉱石、身体ツボ等を挙げている。

池上(2019)が青年期から成人期にある自閉症スペクトラム当事者たちと話して、ASD 児が模型の自動車や電車を並べて遊ぶことや、地図を偏愛する人がいるのは、彼らが「繰り返すこと」「揃えること」「細密さ」が、彼らをどうしても惹きつけるものであるらしいと述べている。

また富井・大西・中西・小松・根来(2020)では、ASD 児の「こだわり」の代表格として「鉄道」が挙げられるとしている。その「鉄道」を活かし、小学生から高校生までの ASD 者で、鉄道に対する強い興味を持つ子どもたちで「奈良教育大学鉄オタ倶楽部(以下鉄オタ倶楽部)」を発足させている。そこでは、子どもたちの「こだわり」を存分に追究でき、友達もでき、余暇支援として機能したと考察している。また子どもたちの間で共同作業や助け合い行動が見られ、参加した子ども達からも肯定的な回答が得られたとしており、対人面の発達支援につながったと指摘している。また、好きなものに熱中できる環境下であれば、ASD 児は自然と他者を意識できる(例:発表会で相手にどう見えるかを意識する)ことが分かった点を重要視している。

知的遅れない ASD 者や健常者ではないけれども、石坂(2014)では、サヴェンの出現率について、一般人口や精神遅滞全体でも少ない(調査によって値は異なるが、例えば 0.14%というフィンランドの報告(Saliviita, Ruusila, & Ruusila, 2000)がある一方、自閉症と診断された人の追跡研究として調査を行った結果、28.5%がサヴェンに該当し、17%が何らかの特異な認知スキルを持っていたことを報告しており、自閉症にこそサヴェンが多いと指摘している。また Rimland(1978)が 119 人のサヴェンの能力を分類している研究を紹介している。音楽的サヴェンが 23 例、記憶のサヴェンが 48 例、美術のサヴェンが 23 例、数学のサヴェンが 17 例、機械の扱いが得意なサヴェンが 14 例、特異な知覚が 4 例という。さらに、Saliviita, et al(2000)の調査では、カレンダー計算が 62%、記憶が 29%、美術が 13%、音楽が 7%、機械の扱いが 4%、数学が 2%だったという。

以上の「知的こだわり」行動の事例を概観すると、幾何学図形、鉄道、絵の細部に注目すること、音楽、記憶、数学(カレンダー計算含)、機械、生き物(虫)、石に関わる「モノ」が挙げられるようである。ただこれらはまだ「知的こだわり」行動の一部であると思われる。今後広く一般の人を対象に、「知的こだわり」行動のバリエーションを収集し、分類していくことで「知的こだわり」行動の実態把握をしていくことが必要であると考えられる。

4. 「知的こだわり」行動の捉えなおしの切り口

3.にて挙げられた「知的こだわり」行動を何に向けて(目標に)、どのように捉え直す道があるだろうか。本研究では、目標として第1に就労やより上位の進学の方針を得ること、第2にライフキ

キャリアの中でも生活充実支援、具体的には余暇支援を挙げる。そして捉えなおしの切り口として、就労や進学を想定する場合は、「知的こだわり」を専門性へつなげる可能性、余暇支援であれば、「知的こだわり」を「心の支え」、もし同じ興味関心を持つ他者とつながることができれば「社会につながる窓」へつなげる可能性が挙げられる。第1でも第2でもどちらの視点でも、「知的こだわり」行動が、(減らすべき行動でもなく、他者に理解してもらえない孤独な取り組みでもなく)当事者が誇りを持って生活を送るためのよりどころになりえると考えられる。

もちろん、当事者の「知的こだわり」行動が、その人の就労やより上位の学校への進学といった進路に直結することが望ましいのはその通りである。しかし、「知的こだわり」行動のすべてを、社会的生産性に有効な、職に関連する部分につなげるべき・生かすべきであると主張したいわけではない。現実的には、そのようなことが困難である場合も多々ある。実際、石坂(2014)は、カレンダー計算というサヴァンの能力について、実生活ではそれほど有用でない能力であると述べている。カレンダー計算の社会的有用性について、その可能性は現在はそれほどないかもしれないが、今後他の活用の道が生まれるかもしれない。とはいえ、現状社会的有用性に役立ちにくいならば、それが進路に直結せずとも、当事者のメンタルヘルスの維持・問題の緩和に作用する余暇支援につなげ、間接的に社会的生産性にポジティブに貢献しうるのではないかと考えられる。この点について、白尾(2016)は、子どもにとって、こだわりの世界に没頭すると楽しい余暇の時間を過ごすことができ、知識を蓄えることで充実感や自信を得ることができるとしている。日々の生活で思うようにならないできごとが降りかかった時に、興味の対象がそのつらさをまぎらわしてくれることもあると述べている。また古長(2020)は、ASD者が自己の強みに関して自覚を持つ場合、その強みを生かして適応的に生活できるかもしれない一方で、強みの自覚のないASD者の場合、強みが十分に生かされず、否定的な自己理解に偏る可能性があるとしている。また、一般の大学生が自己の強みに自覚的であると、うつや不安と負の相関を示すことをASD者にも応用し、自己の強みをASD者が自覚することが、精神的健康を保つうえで重要ではないかとしている。

白尾(2016)は、親が「〇〇博士」的こだわりの強い子どもの興味の世界を肯定的に受け止めるケースほど、子どもが世の中と折り合いをつける力を発揮できる印象を持つとしている。そのような子はその後、彼らの興味の対象を扱う大学や専門学校に進んだりしているという。白尾(2016)は興味の幅が狭く、世の中に向けてチャンネルを開いていない子どもにこそ、そのチャンネルを介して子どもにアクセスすることが大きな作用を持つと指摘している。この点について、ダフィー(2008)も同様のことを述べており、子どもが持ち前の才能を伸ばせるように親が手助けすべきと述べている。

以下、親や周囲が子どもの「知的こだわり」を受け止めて支援することを前提に、具体的な「知的こだわり」行動の捉え直しの切り口を、順に取り上げる。

第1の就労や上位の学校進学への支援について、グランディン&ダフィー(2008)は、絵を描くこと、文章を書くこと、模型を作ること、コンピュータ・プログラムを作ること、庭の景観を設計すること等の才能が、報酬をもらえる仕事につながる可能性があるとして述べている。またグランディン

&ダフィー(2008)は、未診断の自閉症スペクトラムらしき人たちがついていた職業は、数学教師、コピー機の修理技師、研究科学者、産業機器の製図技術者、溶接士、工場の保守管理担当者、司書、コンピュータプログラマー、コンピュータの技術サポート担当者、エンジニアなどだったという。このような実態を受けて、グランディン&ダフィー(2008)は、まず第1に「視覚型思考(絵で物を考える)」の人に合いそうな仕事として、建築・工学製図技術者、自動車整備士、写真家、機械の保守管理技術者、動物の訓練士、コンピュータのトラブル処理担当者、グラフィック・アーティスト、演劇の照明監督、貴金属・宝石細工工やその他の工芸、産業オートメーションのプログラマー、ウェブデザイナー、生物学教師などを挙げている。これらの職は、視覚型思考と長期記憶を活用でき、読み書き障害のある人にも適しているとしている。第2に、「音楽・数学型」の人に合いそうな仕事として、コンピュータプログラマー、数学教師、エンジニア、化学者、物理学者、エレクトロニクス技術者、音楽家・作曲家、音楽教師、統計家、化学研究者を挙げている。第3に、「言語に比較的強く非視覚型思考者」に合いそうな仕事として、ジャーナリスト、会計士、翻訳者、司書、簿記・記録管理担当者、証券アナリスト、特別支援教育の教師、コピー・エディター、言語聴覚士、在庫管理のスペシャリストが挙げられている。小さい頃はリストや数に興味を持つのが特徴だという。また、大学へ行く場合は、情報科学、会計学、工学、図書館学などを勧めている。いずれも仕事につながりそうな学科の代表格である。

白石(2016)では車へのこだわりから車のディーラーになって販売事業で成功した人、音へのこだわりからピアニストとして名を残した人、紙切りへの強いこだわりから切り絵作家になって大成した人、水へのこだわりが水洗いや清掃に向いていき専門職についた人など、こだわり行動がASD者を助け、発展に導いた事例を紹介している。

フィッツジェラルド(2009)は、自閉症とアスペルガー症候群では、数学、医学、工学などに関連して独創性を発揮することがよくあるとしている。自閉症でない人たちに比べると、自分の仕事の分野では従来の芸術家たちからの影響を受けにくく、統合的一貫性が弱いせいで自閉症ではない人達とは異なったものの見方をし、細部に集中することから、自閉症ではない人たちが見落としている世界の一部を見せる能力があり、分野で新しいものを探し求め、その専門的領域内で絶大な想像力を発揮すると指摘している。慣習に従わない人たちでもあり、そうしたことから斬新なものや面白みのあるものが生まれてくると説明している。

第2の余暇支援という観点からのケースを以下に述べる。近藤(2015)では、中学校の通級指導教室に通う生徒たちに鉄道ファンが多いことを取り上げ、ある業種専用の特殊車両に大変強い興味を持っている子どもの事例を紹介している。彼は近所で見かける車両の画像や動画をこまめに取り、それらのデータを収集・整理することを楽しみにしていたという。その後、クルーたちと顔見知りになり、実際に車両に載せてもらったりするようになったという。その様子のある動画サイトにアップしたところ、全世界から数十万件のアクセスがあったという。その子どもの大きな自信や励みとなり、生活の中で多少つらいことがあっても、それを支えに何とか頑張れるだけの耐性もついていったという。「知的こだわり」行動の代表格として「鉄道」が挙げられることは前項にて述

べたが、それをインターネット上にアップして世界中からの反応をもらえる取り組みにつなげたことで、当事者の自尊感情が高まっている点は、他の「知的こだわり」行動に対しても活用できると考えられる。

また日戸(2015)では、余暇活動支援の取り組みを積極的に進めており、限局した興味やこだわりにも焦点を当てた活動の場を工夫する意義を強調している。鉄道、創作活動、ゲームなどを題材に、共通の趣味をもつ者同士が集団で楽しめる場面を設定している。これらに参加することを通して、自閉症の人たちが共通の興味を介して楽しさを共有し、仲間意識や連帯感を持つ効果が期待できるとしている。また家族やスタッフ、観覧者から知識や特技、発想のユニークさについて感心・承認され、肯定的なアイデンティティ形成を促す効果も期待できると述べている。

加藤・岩岡・藤野(2019)では、近年はASD者本人の興味・関心のある話題や活動の中で自発的になされるコミュニケーションによってASD児者の会話が促進されるような報告があると述べている。療育・発達支援の現場における共通の趣味・関心ごとを媒介に会話をする「趣味の時間」の実践(日戸・萬木・武部・本田, 2010)、テーブルトーク・ロールプレイングゲーム(以下TRPG)という卓上会話型ゲームを用いた「物語」という共通の話題を軸にした会話支援の実践(加藤・藤野・糸井・米田, 2012)がある。それらでは、ASD児者の興味のある話題や活動の中で自発的になされる会話がスムーズに進行していると述べられている。ASD者の支援について、まずはそのコミュニケーションへの当事者自身の動機づけが高まらないと効果が出にくい可能性がうかがえる。日戸(2015)や加藤ら(2019)の支援は、SSTの効果を高めるための工夫に関わる実践研究であるが、余暇活動支援という切り口としても有用であると考えられる。このような活動に対象者が関与することで、社会的コミュニケーションスキルの向上に対しても、また精神的健康の維持に対しても効果的である可能性がある。

また、池上(2019)による事例報告として、青年から成人のASD当事者のインターネット上のバーチャル空間上での自助グループの活動を報告している。池上(2019)が関与していた自閉症スペクトラム当事者の自助グループは、当事者のアバターたち自身の手で組織化され、長年継続しているという。毎週1回、2時間、円を描いて床に置かれたクッションにアバターが着座して、延々とチャットが続いていく仕組みである。当事者が現実生活で経験した困りごとや、それぞれの生活で起きたイベントや興味を持った話題を自由に語る人が多いという。構造として、チャットは聴覚が不要なツールである。アバターの表情を観察する必要もない。自閉圏の人々にとって、表情やジェスチャーからニュアンスを拾うことが苦手な人が多い人々にとっては、この方式は好都合となり、言葉のないように集中できる利点が出てくると池上(2019)は述べている。仮想世界のアバターとチャットというフィルターを通すと、自閉症スペクトラムの中心症状とみなされている社会的コミュニケーション障害が嘘のような気がしてくるくらいと述べている。またチャットでは議論がかみ合っており、困っている人やストレスがある人に対して適切な共感の言葉も投げかけられているからだそうだ。この事例は、インターネット上のコミュニケーションを介した余暇支援として捉えることができる。

グランディン&ダフィー (2008) は、子どもが強く執着している事柄を、時間をかけて趣味に発展させられるようにすることを主張している。学校の教師も資源として利用しながら、強みを伸ばし、将来の成功につながる目標へ向かって努力するのを手助けすることが重要としている。また、様々な業種の業界誌を読むか、見本市に行ってみることを勧めている。筆者のグランディンはフードエキスポに行き、変わったアイスクリームを作るすごい機械を見て、それらは誰かしらが発明したということを使ったという。学校に退屈している(高校生の)生徒を連れていくにはもってこいだと述べている。

畑原・成田・嶋田・水内(2016)では、発達障害児・者親の会に所属する、主に特別支援高等部を卒業した成人 ASD 者たちの余暇支援にビアガーデン、アウトレット、忘年会の取り組みを取り入れている。自己選択・自己決定の機会を高めるため、会の「役員会」の取り組みが挙げられている。

以上の事例から、目指す職業の例として、コンピュータ・プログラマーや機械に関わる技師・保守管理を担う者、製図や整備に関わる職、会計・簿記、在庫管理担当、統計学者や数学教師、音楽関係の職や物理学等をはじめとする各分野の研究者が想定される。これらの職は、いずれも「知的こだわり」の対象に非常に近い領域(「モノ」)に向き合い続ける職でもある。これらを目指すために、それに付随して必要な社会的スキルを高める取り組みをしていくと、対象者の動機づけも高まりやすいと考えられる。また、余暇支援の方針としては、インターネット空間内の集団や、インターネットを介したコミュニケーションが大きな可能性を持つと考えられる。対象者が気軽にアクセスすることも可能であり、今後の発展が見込まれる。また、自立して生きていくためのスキルを身に着ける取り組みも重要である。

5. 今後の課題

ここまで議論してきた点について、今後さらに進められるものにはどのようなものがあるだろうか。以下、具体的に2点述べる。

第1に、「こだわり」を「強み」ととらえ直したうえで実際に就労等に活用できた事例を集積してモデルとして広く提示・発信していくことが挙げられる。実際の多くの事例を「アイデア」として多くのチャンネルで発信していけば、個別支援の対象から外れている人々にも活用可能であり、また希望を持つことができると考えられる。そのような中で、どういった人が実際の支援をどのようにしていくべきかといった具体的方策を考えることにもつながっていく。フリス(2009)では、サヴァン能力のうち音楽的才能を持つ事例について、当事者は自己管理は全くできないが、人気のあるピアニストになったケースや、詩を書き続けているケース、画家として活動しているケースが紹介されている。いずれも、活動によって得られた利益を気遣って市場との仲立ちをしてくれる理解ある支援者が必要であると述べている。このことから、目指す道に対象者が進みたいという希望をかなえ、かつ継続させるための支援のあり方や複数の支援者のセッティング等、総合的アレンジも重要な点である。

第2に、第1の点で集積された事例にとどまらず、「強み」として生かせる場やチャンネルその

ものを広く周知し、場・チャンネルを増やしていくための取り組みが必要であろう。具体的には海外での実践事例を収集することや、ICTを活用した新たな職や場の創造を進めている団体の事例を丁寧に収集し発信していくことが望まれる。

第3に、対象者の周囲にいる支援者に、対象者の「知的こだわり」行動の「とらえ方」について多角的に見てもらうことを広く伝えていくことが挙げられる。木谷(2016)は、「こだわり」についてDSM-5の診断基準の記載の基準は、「こだわり」に困っている家族や教師側の視点を中心であるとしている。それをASD児側の視点では「一番落ち着ける居場所づくり、一番スムーズに時間を過ごす順番、そして一番慣れた言語的・非言語的コミュニケーションの取り方」と言い直すことができるとしている。そして「こだわり」への対応として、「こだわり」が適度に守られる環境調整、他者と共感可能な行動への変容、そして、日常生活や学校生活で他者との豊かなコミュニケーションに連動させることが重要であるとしている。対象者の「知的こだわり」行動について、や対象者の周囲の支援者が新たな視点からとらえ直してもらうことが、まずは彼らへの支援につながると考えられる。

引用文献

- 阿部和彦 (1997). 子どもの心と問題行動 日本評論社
- Anthony, L.G., Kenworthy, L., Yerys BE., Jankowski.K.F., James, J.D., Harms, M.D., Martin, A., & Wallace, G.L.(2013). Interests in High-functioning autism are more intense, interfering, and idiosyncratic, than those in neurotypical development. *Development and Psychopathology*, 25, 643-662.
- Fitzgerald, M. (2005). *The Genesis of Artistic Creativity*. Jessica Kingsley Publishers Ltd, London. (フィッツジェラルド, M.(井上敏明監訳) (2009). 天才の秘密: アスペルガー症候群と芸術的独創性 世界思想社)
- Frith, U. (2003) *Autism: Explaining the Enigma* (Second Ed.) Blackwell Publishing. (フリス, U.(富田真紀・清水康夫・鈴木玲子訳) (2009). 新訂 自閉症の謎を解き明かす 東京書籍)
- Grandin, T. & Duffy, K. (2004). *Developing Talents: Careers for Individuals with Asperger Syndrome and High-Functioning Autism*. Autism Asperger Publishing Co. (グランディン, T.& ダフィー, K.(梅永雄二監訳, 柳沢圭子訳) (2008). アスペルガー症候群・高機能自閉症の人のハローワーク: 能力を伸ばし最適な仕事を見つけるための職業ガイダンス 明石書店)
- 畑原幸貞・成田泉・島田明子・水内豊和 (2016). 自閉症スペクトラム障害成人に対する余暇支援一適応行動の状態ならびに自己選択・自己決定を尊重した活動実践からー とやま発達福祉学年報, 7, 11-22.
- 池上英子 (2019). 自閉症という知性 NHK 出版新書
- 石坂好樹 (2014). 自閉症とサヴァンな人たち: 自閉症にみられるさまざまな現象に関する考察 星和書店
- 金生由紀子 (2016). 子どものこだわりの芽生えと発達(Pp.12~18.) 深谷和子・新井邦二郎・有村久春・沢崎達夫・諸富祥彦(編) 児童心理((特集)こだわりの強い子), 70, 金子書房
- 加藤浩平・藤野博・糸井岳史・米田衆介 (2012). 高機能自閉症スペクトラム児の小集団におけるコミュニケーションの支援ーテーブルトークロールプレイングゲーム(T R P G)の有効性について コミュニケーショ

青年期における ASD 者から健常者にみられる「知的こだわり」行動の捉え直し (天谷 祐子)

ン障害学, 29,8-17.

- 加藤浩平・岩岡朋生・藤野博 (2018). 自閉スペクトラム症児の会話の特徴と話題との関連—アニメ・漫画・ゲームを題材にした「趣味トーク」の実践— 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I,70, 489-497.
- 木谷秀勝 (2016). 成長を促すこだわり、阻むこだわり(Pp.34-39.) 深谷和子・新井邦二郎・有村久春・沢崎達夫・諸富祥彦(編)児童心理((特集)こだわりの強い子), 70, 金子書房
- 近藤幸男 (2015). 中学校通級指導教室で出会った”こだわり”(P p.82-83.) こころの科学(183) 日本評論社
- 古長治基 (2020). 青年期以降の自閉スペクトラム症者における「強み」理解の特徴 特殊教育学研究, 57,207-218.
- 日戸由刈・萬木はるか・武部正明・本田秀夫 (2010). アスペルガー症候群の学齢児に対する社会参加支援の新しい方略—共通の趣味を媒介とした本人同士の仲間関係形成と親のサポート体制づくり 精神医学,52, 1049-1056.
- 日戸由刈 (2015). ライフステージを通じたこだわりの活用—幼児期の生活改善から学齢期以降の社会参加へ(Pp.59-64.) 青木省三・宮岡等・福田正人(監修) こころの科学(183) 日本評論社
- Rimland, B. (1978). Savant capabilities of autistic children and their cognitive implications. In Serban, G.(ed.). *Cognitivedefects in the development of mental illness*(Pp.43-65.). New York, Branner/Mazel.
- Saliviita, T., Ruusila, L., & Ruusila, U. (2000). Incidence of savant syndrome in Finland. *Perceptual and Motor Skills*,91,120-122.
- 白石雅一 (2016). 自閉スペクトラム症のこだわりを理解し支援する(Pp.75-80.) 深谷和子・新井邦二郎・有村久春・沢崎達夫・諸富祥彦(編) 児童心理((特集)こだわりの強い子), 70, 金子書房
- 白尾直子 (2016). 「〇〇博士」といわれる子—興味のこだわり(Pp.52-59.) 深谷和子・新井邦二郎・有村久春・沢崎達夫・諸富祥彦(編) 児童心理((特集)こだわりの強い子), 70, 金子書房
- TEENS 執筆チーム (2017). 発達障害の子のためのハローワーク 合同出版
- 富井奈菜実・大西貴子・中西陽・小松愛・根来秀樹 (2020). 自閉スペクトラム症の「こだわり」と生かした「奈良教育大学鉄オタ倶楽部」の取り組み 奈良教育大学紀要(人文・社会科学), 69, 1-14.
- 梅永雄二 (2021). 発達障害の人の就労アセスメントツール : ◎BWAP2<日本語版マニュアル&質問用紙> 合同出版

